

第IV部門

駅における広場空間の創出に関する景観設計シミュレーション

京都大学工学部 学生員 ○村上 理昭
 京都大学大学院工学研究科 正会員 川崎 雅史

1. 研究の背景と目的

駅は交通処理の機能のみならず，都市形成や都市活動の拠点としての空間的機能が求められている．近年，少子高齢化社会への移行や地域の活性化のニーズから，駅圏の生活者や来訪者にとって，休息や滞留の空間，まちのオリエンテーションに必要な眺望空間，都市観光情報を取得する場などを与える，公共的空間の必要性が一層高まっている．それは，本来，駅前広場として実現されるものであるが，都市近郊における小中規模の駅舎においては，敷地空間のゆとりがなく，広場空間の創出が困難な状況が多い．

本研究は，新たな広場空間の創出を目的とした景観設計のシミュレーションを展開し，駅における広場創出のイメージを探究することを目的とする．

2. 計画コンセプト

(1) 対象駅の概要

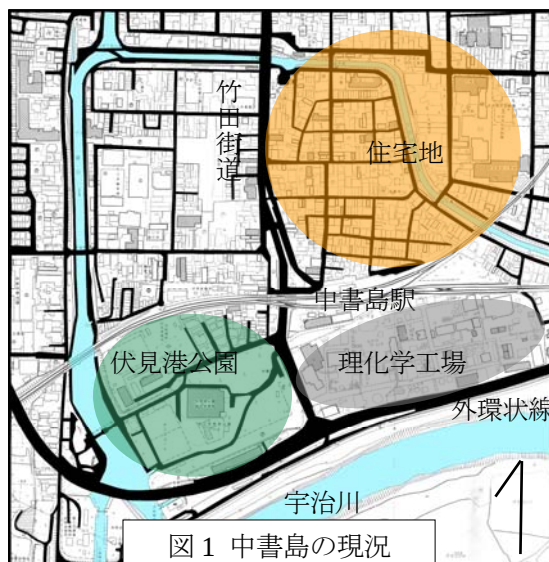


図1 中書島の現況

設計シミュレーションの対象は，京都市伏見区の中書島駅である．舟運とともに発達した宿場町の伝統的な街並を観光のポテンシャルに持ち，駅の開発とともに住宅地も拡大した．周辺人口は284,345人である．駅乗降客数は12,633人／日であり，近隣の沿線では比較的多い．駅の北側には住宅が迫っており，南側には広大な敷地を持つ理化学工場や伏見

港公園があり，その先には宇治川の雄大な自然景観が広がっている（図1）．

(2) コンセプトの抽出

はじめに，駅の周辺地区に関して，地区の成立過程に関する文献資料や現地でのフィールド調査を行い，①都市の公園や賑わいの場所（盛り場，繁華街等）が少ない，②歩行者空間が分断している（駅と接続街路），③都市の玄関口・情報発信が不足している課題点を抽出した．これらの課題を踏まえて，駅に求められる空間のコンセプトとして，①都市拠点としての賑わい空間の創出，②歩行者ネットワークの連続性の強化，③まちの玄関口・情報発信をする空間創出，という3点を抽出した．

これらを達成し，駅とまちを一体的に連続させ，活動の場所となる「駅前広場」の整備が必要であることを認識し，デザインイメージへ反映させた．

3. 駅空間の設計課題

ここでは，対象駅における敷地状況，歩行者動線などの現状を認識し，設計課題を整理した．

(1) 広場空間の敷地制約

中書島駅は，相対式ホームの間に島式ホームがある三面四線の地平駅である．駅の南北には住宅地と工場が接近しており（図1），また，南側にはバスターミナルがあるが，敷地の大半は京阪電鉄の建物が占めている．北側には切符購入など駅利用に必要な最低限のスペースしかない（図2）．

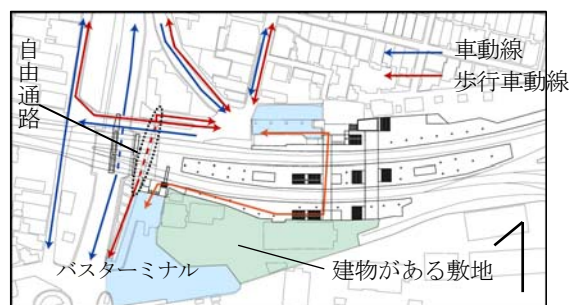


図2 中書島駅周辺現況平面図

そのような立地条件であることから，当駅には広場を新たに創出するとしても敷地は極めて限られていることがわかった．

(2) 歩行者動線の課題

周辺動線に関しては、歩行者、自動車動線等が複雑に錯綜しているのが現状である（図2）。南北を繋いでいる自由通路（図2）は多くの歩行者が利用しているが、幅員が狭く、薄暗いアンダーパスであり快適であるとは言えない。特急電車の停車するホームに近い北口に利用者が集中していることも、線路による南北の分断を助長している。また、周辺街路から見て駅施設の視認性が低いという課題があった。

4. 景観設計のシミュレーション

計画コンセプトと設計の基本的課題を解決するための駅における広場空間の提案を行い、図面・模型によるシミュレーション表現によってその検証を行った。

建設コストに負担のかかる実現可能性の低い設計案を避けるために、設計の前提として、①ホームと線路は現状を維持する、②駅の周辺建物と街路にも現状を維持する、という2点を条件として設定し、以下に主な設計試案の内容を記載した。

- 敷地制約から、新たな広場空間を駅の立体的利用を考慮し、ホーム上の屋根を利用して、ゆとりのある敷地面積（2,450m²程度）の屋上広場を創出する。（図3,4）。

- 駅南側について交通広場を整備し、駅の滞留広場とも連続させ、南北の分断を解消する。

- 広場の創出に際して、利用目的ごとの歩行者動線を整理した。現在、北と南の二箇所に分かれている改札口を屋上広場の中央改札として統合し、駅に降り立った人を南北に振り分けることにより、まちへの連続性をスムーズにする（図4）。

- その他、現在ある自由通路を拡幅し、南北の移動を快適に行う工夫を行った（図3,4）。

以上の広場空間の創出は、図面・模型によるシミュレーションで表現した（図3～6）。これによって、ゆとりのある広場が創出され、南北の歩行者動線のまちへの連続性が概ね確保できることが確認できた。

ユレーションで表現した（図3～6）。これによって、ゆとりのある広場が創出され、南北の歩行者動線のまちへの連続性が概ね確保できることが確認できた。



図3 設計案屋根伏せ図

創出された広場は、様々な用途で利用できるプラザをデッキに併設し、デッキ中央に配置するインフォメーション施設と合わせて情報発信を行なうことが可能である。このデッキからは、駅南側に広がる公園の緑豊かな景観を眺望することができる（図5）。また、周辺街路からの駅の視認性も高めることで（図6）、駅の玄関口・情報発信の機能を向上することができる。



図5 デッキからの眺望

図6 駅の視認性

5. 結論

本研究では、駅空間に新たに広場を創出する可能性を検討するために、景観シミュレーションを行った。駅のコンコースの構造を立体的に使用することで、眺望性をもつ豊かな屋上広場を創出でき、地上レベルにおける自由通路と交通広場整備とあわせて南北の分断を避ける可能性をもつことが確認できた。

駅についての詳細設計と構造計画、建設コストによる実践的な課題は残されているが、基本的な空間構成のあり方を提案できたものと思われる。

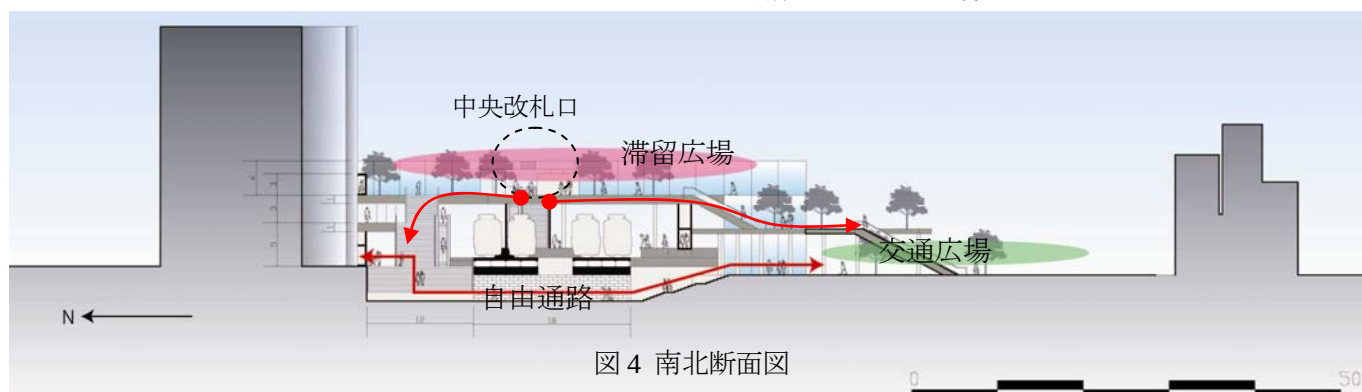


図4 南北断面図